



大賞

新潟県戦後五十年詩史 - 隣人としての詩人たち 鈴木 良一さん(新潟市中央区)

新潟県で発行された1946年から1995年までの詩誌・詩集を収集し、それらを資料として詩史としたもの。詩人たち1,000名、詩誌152誌、詩集340冊を50年間の詩史としました。

発行年月 令和7年3月1日

発行者 玄文社

価格 10,000円

問い合わせ先 著者本人(080-5647-0571)



選考委員コメント

戦後50年間にわたって、県内で発行された膨大な詩の雑誌や同人誌などに細かく目を配り、それらを詩の歴史として資料化した熱意に感服した。(池田 哲夫)

著者について

詩集『道標』『岸边なき流れ』『ちょっと古いレールの上を歩いてみないか』『不思議荘のゆりかご、あるいは写植オペレーターの探字記』『母への履歴』『あやかしの野師』『ひとりひとりの街』

詩誌目録『紙魚』編纂、詩誌『野の草など』主宰、『北方文学』同人

日本現代詩人会会員、新潟現代詩人会会員
早稲田大学第一文学科ドイツ文学科卒



藤沢周賞

『僧侶日日』橘 芳因歌集 橘 芳因さん（田上町）

父の早世で、囚らずも30代で高校教員と僧侶の二足草鞋の生活になりました。この歌集は親鸞の思想と寺の仕事の乖離に悩み、信仰心の希薄なまま教師と住職を続けるという現実の生活の葛藤と苦悶の日々の記録です。

発行年月 令和7年3月30日
発行者 喜怒哀楽書房
価格 1,700円
問い合わせ先 考古堂書店



選考委員コメント

この歌集は「私小説」として読むことが出来る。「私小説」を辞書的に言うと「作者自身の生活や体験、心境をありのまま書くことによって、人間の真実を追求しようとするもの。」歌人は、僧侶と高校教師の二足の草鞋の中で、祖父母、父母、同僚、教え子などとのことを、誠実に歌い上げている。(選考委員：若月 忠信)

著者について

新潟市生まれ。地理の高校教諭、僧侶、コスモス短歌会選者を経て現在は宮柵二記念館運営委員、カルチャー教室での講師 等



文芸部門賞

押し里のこと、語ってもいいですか？

今野 直倫さん（糸魚川市）

生まれた場所でも、育った場所でもない。けれど心がふっとほどける、そんな町 新潟県糸魚川。暮らしながら、少しずつこの町と自分が溶け合っていく。「押し里」とも言えるこの街での日々を綴った7つの小さな物語。

発行年月 令和7年7月18日
発行者 著者本人
価格 1,540円
問い合わせ先 著者本人（090-4193-7278）



選考委員コメント

ふるさとでもない糸魚川の街にやってきて、あふれるばかりの愛を注いで暮らす日々を綴る。こんな“押し里”の人がいるからこそ地域の活性化が育まれるんだと思う。（選考委員:佐藤 和正）

著者について

愛知県生まれ。糸魚川市でカフェ「糸と糸」を営む。

『心の病気が引き合わせてくれた本当の自分』（『シナプスの笑いvol.55』収録）

『あの頃のワープロはもうないけれど』（『書くしかないひとたちによるエッセイ集（#書くしか）』収録）



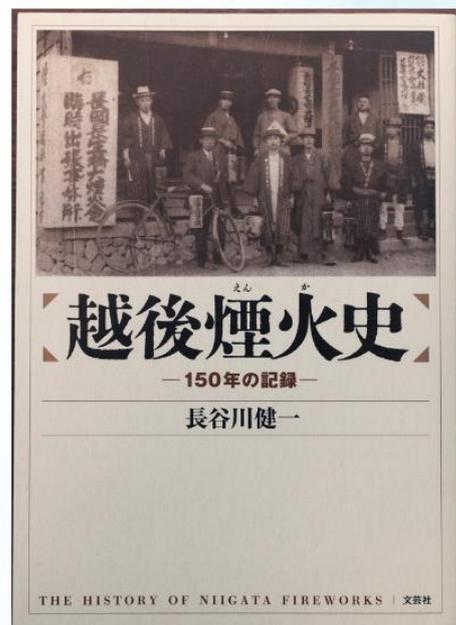
記録誌部門賞

越後煙火史 – 150年の記録 –

長谷川 健一さん (長岡市)

新潟の花火をこよなく愛し、地元長岡で花火資料館まで開設している著者が、長年にわたる調査と資料の掘り起こしを積み重ね、新潟花火の歴史とその魅力をまとめ上げた一冊です。

発行年月 令和7年8月15日
発行者 株式会社 文芸社
価格 1,980円
問い合わせ先 株式会社 文芸社
TEL:03-5369-3081



選考委員コメント

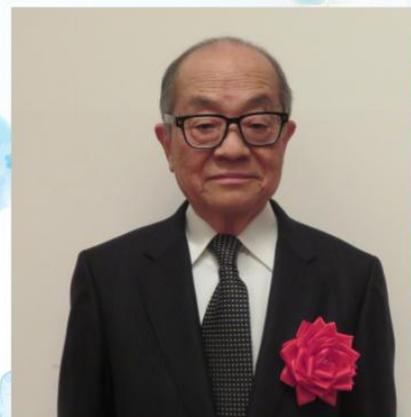
戦前、「煙火」と称した花火。長岡、片貝、柏崎、新潟をはじめ県内各地の花火の歴史を著した大作。花火記念館をも開設した著者の情熱は読み手を魅了する。(選考委員:大田 朋子)

著者について

長岡市生まれ。高校教諭を経て現在は長岡郷土史研究会顧問、「花火の駅・長岡花火ワールド悠」館長

共著『新潟県の近代化遺産－日本近代化遺産総合調査報告書－』新潟県教育委員会

『近代遺跡調査報告書－エネルギー産業－』文化庁文化財部記念物課



選考を終えて

風土が生んだ精魂の書

『北越雪譜』を著した鈴木牧之、『大日本地名辞書』を編纂した吉田東伍、『大漢和辞典』を完成させた諸橋轍次……。文化と真実と歴史をすべて伝えたいという情熱、集中力、忍耐力とで、人間業とは思えぬ著作をものした新潟の先人たち。その意志や強度はやはり風土が育むのか。現代の新潟人もまた彼らの想いを継ぐかのごとく、驚くべき精魂の書を上梓した。

大賞の鈴木良一『新潟県戦後五十年詩史—隣人としての詩人たち』は一九四六～九五年までに新潟県で発行された詩集・詩誌を収集、渉猟しながら、この地で興った文化の豊かな動きを徹底的に追跡した稀有なる詩史。詩集340冊、詩誌152誌、詩人の数として1,000名を超える、膨大な第一級資料となった。戦後民主主義の中で新潟の詩人たちが自由を求め切磋琢磨し、思考し、表現したその息遣いや熱気まで伝える詩史は、羅列や年表的な凡百の資料とは一線も二線も画す、エネルギーに満ちたものである。新潟の言葉の息吹はまた、未来へと継がれていく。

記録誌部門賞の長谷川健一『越後煙火史 - 150年の記録 - 』も、新潟花火への熱狂的なほどの愛と情熱でその歴史を辿り、調査・資料収集した書物である。地元長岡で花火資料館を開設するほどの著者の想いは、また花火に親しむ新潟人への愛でもあるのだ。単なる歴史ではなく、いかに花火の美しさと面白さと祈りを伝えるかに込められた筆致は、読み物としてもじつに面白く、豊饒。貴重な写真も楽しませる。

文芸部門賞の今野直倫『押し里のこと、語ってもいいですか?』は、県外から糸魚川に住み始めた著者の心温まるエッセイ集。生まれ故郷ではない土地の食堂、魚屋、温泉、喫茶店……。初めての土地にもかかわらず、自らの心の底でつぶやく言葉が、自ずと人々や風景に届く、また、人々の心の声や風景のささやきが自分に聞こえてくる不思議。心と土地の周波数が合った時、日常の中に新しい癒しの風景が開け始めるのだ。

藤沢周賞は橋芳圀『僧侶日日 橋芳圀歌集』。僧侶と定時制高校の教師という二足の草鞋の生活の中で、その日常の葛藤や慈しみから歌が生まれた。詩的感性の灯が照らす日々にはまた濃い陰翳もある。そこを直視する眼差しから実存的な哲学が立ち上がりもするのだ。さりげない日常の歌のようであり、詩と宗教と哲学がひしめいている。

また最終候補に残った高橋健男『新潟県満蒙開拓移民研究データブック』は、以前に『新潟県満州開拓史』で大賞を受賞されている関係で選考外となってしまったが、二〇年の調査研究の集大成である。この新潟人の意志と情熱の賜物なくして、以後、「満蒙開拓移民」研究は語れないであろう。新潟が誇る瞳目の歴史資料である。

選考委員長 藤沢 周



新潟出版文化賞

県内在住者等が執筆した自費出版図書に光を当て広く紹介することを目的に、平成11年から隔年で募集を行い、優れた作品を顕彰している全国でも珍しい文学賞です。

受賞作品

大賞

新潟県戦後五十年詩史 - 隣人としての詩人たち

藤沢周賞

僧侶日日 橘 芳園歌集

文芸部門

推し里のこと、語ってもいいですか？

記録誌部門

越後煙火史 - 150年の記録 -

第14回募集期間

令和7年5月20日（火）～7月31日（木）

第15回の開催は令和9年度を予定しています。

応募総数

文芸部門 37 作品、記録誌部門 34 作品、学生の部 1 作品 計 72 作品

選考委員

選考委員長 藤沢周（作家）

選考委員 <<文芸>> 佐藤 和正（フリージャーナリスト）

本間 由美子（フリーライター）

若月 忠信（文芸評論家）

<<記録誌>> 池田 哲夫（新潟大学名誉教授）

大田 朋子（エッセイスト）

花ヶ前 盛明（居多神社宮司）

藤沢 周 氏

新潟市生まれ。新潟明訓高等学校卒業後、法政大学文学部卒業。「ブエノスアイレス午前零時」で第119回芥川賞受賞。元法政大学経済学部教授

